

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320033

研究課題名(和文) 1960～70年代の概念芸術：作品の所在調査とデータ・ベース構築

研究課題名(英文) Conceptual Art in the 1960s and the 1970s: Locating Works and Building a Database

## 研究代表者

中林 和雄 (Nakabayashi, Kazuo)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・その他部局等・研究員

研究者番号：50217816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,800,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代から1970年代にかけて世界各地で同時期に登場した、表現を支える物質的基盤よりも思考(アイデア)を優位に置く「概念芸術(コンセプチュアル・アート)」について、欧米に比して日本での歴史的な検証がほとんど行われていないことに鑑み、印刷媒体に発表された「作品」や展覧会史や批評史など基礎的なデータの収集と分析を行った。特に、日本における「概念芸術」という用語の変遷史を掘り起こすことで、錯綜する論点を整理し、今後の研究のための土台を構築した。

研究成果の概要(英文)：Considering the situation in Japan where there has been almost no historical examination into Conceptual Art that emerged globally from the 1960s to the 1970s and attached greater importance to ideas than to the material foundation of artistic expression, we collected and analyzed the basic data including works published in printed media, and historical materials on exhibitions and criticism. In particular, we uncovered the historical changes in the meaning of the term “gainen geijutsu (conceptual art)” to tidy up the points under tangled discussion and to lay the foundation for future study.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 芸術諸学 戦後美術 概念芸術 コンセプチュアル・アート

### 1. 研究開始当初の背景

1960～1970年代に世界各地で同時多発的に出現した、表現を支える物質的要素よりも思考(アイディア)を優位に置く「概念芸術(コンセプチュアル・アート)」の包括的な研究が日本で進んでいないことが背景にあった。

日本でも1960年代の半ばから70年代前半にかけて、概念的な芸術の多様な展開が見られたにもかかわらず、それらを束ねる「概念芸術」という用語が定着しなかったことが一因となって、その歴史化の作業が欧米に比べて著しく遅れている。

本研究は、その状況を少しでも変えるために、日本における「概念芸術」の基礎的な資料の収集と分析に努めた。

### 2. 研究の目的

本調査研究は、1960～1970年代に登場した「概念芸術(コンセプチュアル・アート)」について、日本国内の作品・資料の調査と収集による基礎的なデータの蓄積と、作家、評論家、画廊主等関係者へのインタビューによる活字化されていない情報の蓄積を進め、今後の概念芸術もしくは概念的な傾向をもつ芸術の研究を推進するための基盤構築を目的とする。

具体的には、第一に国内外の基礎的な文献の収集、第二に作家、関係者の手元に残っている作品の現物や展覧会の記録などの収集・整理、第三に関係者の証言の収集を三本の柱としたい。

### 3. 研究の方法

(1) 欧米の一次資料、二次資料の収集。日本の動向を理解するために不可欠な欧米の動向を捉えるための資料の収集に努めた。「概念芸術」のひとつの特徴は国を超えた作家のネットワークが存在したことであり、日本人作家の松澤宥や荒川修作や河原温などは、欧米の「概念芸術」に特化したグループ展にしばしば出品している。こうした一次資料を収集しつつ、欧米における「概念芸術」研究の推移と現状を知る二次資料を収集した。こうした二次資料を通して、定義を拒む「概念芸術」研究の難しさと、それでも同現象を歴史化するために試みられてきた様々な方法論を学んだ。

(2) 日本の一次資料の収集と分析。1960年代後半から1970年代前半にかけての美術雑誌、新聞などに掲載された、「概念芸術」ないしは概念的な芸術についての記事を網羅的に拾い集めた。とりわけ「アイディア」「観念」「概念」「コンセプション」などのキーワードの用例を収集することで、「概念芸術」という用語の導入の経緯と、日本語における語義の変遷、そして批評言語としての意義を捉え直すことが可能となる。

このような文献の収集と言説の分析の作

業と並行して、展覧会という形式ではなく印刷媒体を表現の場として選ぶことの多かった「概念芸術」の「作品」を収集していった。通常の美術作品と異なり、印刷媒体と深く結びついた「概念芸術」特有のコミュニケーションのあり方が浮かび上がってきた。

(3) セミナーの開催。同時代に「概念芸術」に深く関わった美術評論家のたにあらた氏をお招きし、外部の研究者も交えて計3回のセミナーを開催し、「概念芸術」研究の方法論について議論する機会を設けた。そこで得られた知見は、「概念芸術」を広義に理解することの意義であった。すなわち美術の制度に対する省察のみならず、言語学、構造主義、記号論などの現代思想の潮流や、冷戦期特有の文明論、高度成長を謳歌する日本で展開した資本主義批判、さらには68年に始まる世界的な学生運動とも関連する思想史的な背景にまで考察の対象を広げる必要があるというものだ。その一部は文献資料の収集に反映された。

(4) 作家や関係者への聞き取り。「概念芸術」に深く関わった作家や評論家を訪ね、聞き取り調査を行った。

### 4. 研究成果

(1) 「美術と印刷物-1960～70年代を中心に」展の開催。2014年6月7日～11月3日の会期で、東京国立近代美術館2階ギャラリー4にて、概念や行為やプロセスなど非実体化の傾向を強めた60年代から70年代にかけての美術と印刷媒体の関係を検証する展覧会を開催した。同展は、東京国立近代美術館と国立新美術館のアートライブラリが所蔵する資料のみで構成された。すでに収集されていた資料の中から本科研で発掘・調査したもののみならず、本研究費で収集した資料をも最大限活用した展示となった。

アーティスト・ブックに限らず、展覧会カタログ、書籍、雑誌、新聞、ポスター、チラシ、ミニコミ誌にまで範囲を広げ、この時期の作家にとって「印刷物」がいかに重要な実験の場であったかを明らかにした。定義の困難な「概念芸術」に接近する方法として、当該期間の美術の変容を如実に示す「印刷物」というメディアに注目したのである。なぜなら、モノとしての形を残さないアイディアやプロセスに重きを置く概念的な芸術にとって、印刷物は記録と伝達的手段として欠かせない媒体となったためだ。

しかし、「美術と印刷物」展の特徴は、「印刷物」に着眼したことで、「概念芸術」のみに限定せず、コンクリート・ポエトリーや図形楽譜、デザイン、イラストレーションなどの同時代の多様な動きも相互の関連性を含めて視野に収めたことにある。結果的に、60年代後半から70年代前半にかけての芸術の根源を問い直す諸実践を、印刷物という地平

において複眼的に再考する機会となった。

全会期を通して力点が置かれたテーマを抽出すれば、以下のようなものになるだろう。第一に 60 年代を席卷したマクルーハンのメディア論および情報通信技術や複写機などのテクノロジーの発達と印刷物の関係。第二に「オフ・ニュージウム」の発想とともに流行した「誌上展」という形式と郵便を利用した新たなコミュニケーションの方法。第三に画廊や作家集団が刊行するミニコミ的な印刷物の役割。第四にジャンル横断的なプロジェクトやイベントにおける印刷媒体の機能。第五にアイデアやプロセスを重視する芸術行為と印刷物の関係、および印刷物という「物質」に対する作家の意識。第六にボックス方式やカード方式やファイル方式などの印刷物の形式。第七に日本を含むアメリカ、ヨーロッパ、南米をつなぐ概念的な芸術の世界的なネットワーク。

担当者によって分担して執筆された解説全 53 点は、同種の展覧会が過去になかったこともあり、今後の研究の土台となる資料的価値を有する。



(「美術と印刷物」展会場風景)

(2) データベース「日本における「概念芸術」の系譜 1964-1974 年」の作成。1964 年から 1974 年という範囲で、「概念芸術」に関連する国内外の主要な展覧会、文献をまとめたものである。「概念芸術」という言葉が内包する意味の広がりや当時の言説の中に辿りつつ、それを特定の作品群を束ねるラベルとしてではなく、この時期特有の芸術の思想的基盤として捉え直すことを目的に編まれた。構成は、年ごとに以下の項目が順に配列されている。

1. この年 解題
2. 展覧会歴 日本
3. 展覧会歴 海外の動向(主要なグループ展に限定)
4. 文献 単行本
5. 文献 逐次刊行物単行書

(3) これらの成果は、これまで本格的な研究が不在であった日本の「概念芸術」に対して、いくつかのアプローチの方法を提案するものとなった。近年欧米において日本の戦後美術への関心が高まっているが、グローバルな観点から「概念芸術」を再考する上でも、これらの基礎的な研究は貢献することだろう。しかし、本研究が明らかにしたことは、むしろ、グローバルな同時性だけでは説明のつかない、日本独自の「概念芸術」の展開とそれに伴う言説の生成であった。

今後の課題も見えてきた。この時期の作家の特徴が、特定の媒体に拘泥せず、むしろ複数のメディアを組み合わせることで表現を構想したことにあるとすれば、「印刷物」に限定した今回の研究成果は、その一層にしか目を向けていないことになる。当然ながら、次なるステップとして、個々の作家と作品における複数の媒体の関連を子細に分析していく必要があるだろう。

さらに 60 年代から 70 年代のプロセスに重きを置く作品は、画廊や屋外での発表後にモノが残っていないことが多いが、これらの作品イメージの形成に写真が果たした役割も無視できない。主としてモノクロで撮影されたそれは、色彩を排することで、実際の印象とは異なった「フォルム」に作品世界を還元しているのだ。これは作家自身のコントロール下に置かれた複数メディアの活用ということではなく、写真家という他者の介在と印刷物というやはり他者の介在を前提とする媒体によって、作品のイメージや言説が流布していくプロセスに他ならない。印刷物とそれが記録し伝達する「作品」との間には、このように複数の主体が複雑に絡みあっていることにも注目したい。それは個人主義的な制作概念に根ざした既存の「美術」を問い直す契機となるだろう。

また、誌上展に代表されるような印刷物の

中で完結する仕事についても、文学や音楽や建築など周辺領域との関連や、「メールアート」に代表されるメディアを活用した新しいコミュニケーションの方法という観点、さらに同時代の重要なトピックであった「複製」という問題を含めて詳細な分析が待たれる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

鈴木勝雄、日本における「コンセプチュアル・アート」元年-1969年の言説空間から、美術フォーラム 21、査読有、第30号、2014、pp.78-83

松本透、戦後日本美術の歴史と現在、美術フォーラム 21、査読有、第30号、2014、pp.42-43

三輪健仁、「EOS ART BOOKS」という書店-井上憲彦・靖子氏に聞く、現代の眼、査読無、第607号、2014、pp.2-7

牧口千夏、フィクションに取り込まれた現実、現代の眼、査読無、第605号、2014、pp.2-3

鈴木勝雄、不在の類型学：日本における概念的な芸術の系譜(1)、東京国立近代美術館研究紀要、査読有、第18号、2014、pp.64-81

増田玲、新しいコレクション 中平卓馬《サーキュレーション-日付、場所、行為より》、現代の眼、査読無、第603号、2013、p.12

松本透、作品研究 村岡三郎《溶断-1380 x 11000 mm》、現代の眼、査読無、第602号、2013、p.14-16

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計3件)

牧口千夏、京都国立近代美術館、映画をめぐる美術-マルセル・ブロータースから始める、2013、204

三輪健仁、青幻舎、ドキュメント「14の夕べ」パフォーマンスのあとさき、残りのものたちは身振りを続ける、2013、378

藏屋美香、保坂健二郎、榎田倫広、東京国立近代美術館、高松次郎ミステリーズ、2014、320

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

中林 和雄 (Nakabayashi Kazuo)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課長  
研究者番号：5 0 2 1 7 8 1 6

(2)研究分担者

藏屋 美香 (Kuraya Mika)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・美術課長  
研究者番号：3 0 2 6 0 0 0 3

鈴木 勝雄 (Suzuki Katsuo)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・研究員  
研究者番号：3 0 3 2 1 5 5 8

保坂 健二郎 (Hosaka Kenjiro)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・研究員  
研究者番号：4 0 3 3 2 1 4 2

水谷 長志 (Mizutani Takeshi)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・研究員  
研究者番号：5 0 1 8 1 8 8 9

三輪 健仁 (Miwa Kenjin)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・研究員  
研究者番号：5 0 3 5 6 2 7 6

中村 麗子 (Nakamura Reiko)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・研究員  
研究者番号：5 0 3 7 1 0 0 0

榎田 倫広 (Masuda Tomohiro)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・研究員  
研究者番号：70600881

松本 透 (Matsumoto Toru)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・副館長  
研究者番号：90150044

大谷 省吾 (Otani Shogo)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・研究員  
研究者番号：90270420

牧口 千夏 (Makiguchi Chinatsu)  
独立行政法人国立美術館京都国立近代美術  
館・研究員  
研究者番号：90443465

(3)連携研究者

( )

研究者番号：